

平井聖監修・執筆、浅野伸子執筆

## 『泥絵で見る大名屋敷』

内田啓一

泥絵。このなんとも美しくない響きの名称は一体誰がつけたのだろう。泥の絵という子供が得意とする砂場のいたずら書きのような感もする。事実、日本美術史の流れの中では民衆絵画というカテゴリーの中に入れられ、本格的に論じられたことも少ない。それは正統的な絵師が描いたものではないという理由であったり、描写が稚拙であり、鑑賞に堪えないという「美を前提とした」意識からくるものであった。私なんぞも泥絵というと、一昔前の御仁なら御理解いただけだと思うが、風呂屋の壁に描かれた富士山と駿河湾を思い浮かべてしまうものだった。

しかし、昨今は違う。泥絵は立派な美術作品に成り上がった。中国・清朝から伝わった透視遠近法が江戸の浮世絵師や町絵師の中でも使いこなされ、司馬江漢や亜欧堂田善らが描いた阿蘭陀経由の洋風画が浸透すると、それまでの風景画と異なる



2004年2月7日発行  
学習研究社  
B5変形判 111頁  
定価 1600円(本体)

った様式の絵が描かれ始めた。安田雷州や玄々堂などの微塵銅版画でも遠近法が駆使された風景が好んで描かれた。絵空事であった絵画に現実味をもたせるようになったといえよう。風景画にもある程度の正確さが求められたのだった。風景画といっても古来から描かれるのはお約束の場であった。風景画は名所絵であり、描かれる対象地は決まっている。江戸の場合は隅田川周辺や日本橋、参詣者の多い神社・仏閣である。そして遠近法で描かれた風景画はもう江戸の人々にとっては目新しいものではなくなった。江戸の人々の感覚と新しいものは今も昔も変わらない。

江戸は日本一の政都であり、また、経済の中心地・商都でもあった。土産物として安価で軽い浮世絵が各地に広がった。その意味では土産絵であり、京都のお隣・大津で描かれた大津絵とかわらない。浮世絵は俗に「蕎麦一杯」の値段といわれ

る。泥絵の値段はわからないが、やはり安価であるがゆえ、庶民が求めることのできるものであった。断っておくが、庶民といっても落語に出てくるような下町の横丁に住むはっちゃんやとめさんだけが買う物ではない。地方から江戸にやってきた商人や江戸詰の武士が故郷に帰る時に買い求めたのであった。泥絵も決して床の間に飾る絵画ではない。あまり上質とはいえない紙に泥絵の具を使い、しかも絵の具の色数もややくすんだものに限られている。いかにも短時間で仕上げました、という感じの絵画である。

前置きが少々長くなったが、本書はそんな泥絵によって描かれた江戸城や大名屋敷を江戸切り絵図や資料写真を併用して懇切丁寧に解説した書である。ベースとなったのは海外で日本美術を買い求めたことで知られる渡辺紳一郎コレクション。全カラー・ページではないことは惜しまれるが、値段も手頃におさえられるのでこれも良し。近年の江戸ブームにのって風景画の浮世絵師・歌川広重の描く『東海道五十三次』や『名所江戸百景』、明治時代の光線画の大手・小林清親の『東京新名所』なども同様な資料が活用されて分解・解説された図書が多く出版されており、本書の手法もそれ程斬新なものではない。しかし、なんといっ

も驚くのは、比較されてはじめて解る泥絵に描かれた建築物の正確さであり、定規引きの直線によるデザイン性である。しかも、泥絵を単品で見るときの曖昧模糊とした鑑賞眼から、泥絵をまとまりとしてみたときの資料性の高さに驚かされるのである。泥絵に描かれた大名屋敷を一枚でみて「なるほど、どこかのお屋敷が描かれている」程度の感慨しかもたないだろう。しかし、本書のようにまとまって「何々藩何々邸」と分析されると、もう泥絵を見直さざるを得ないのである。浮世絵にみられる絵師の主張や誇張がない。北斎や広重の作品にあらわれる個性がない。泥絵絵師の眼が素直に風景を捉えており、それが却って客観性をもった画面構成となっている。

江戸の町、というと駿河町の越後屋や日本橋界隈の百軒店など商人街を思い浮かべてしまう。ところが都市江戸は諸国各藩の上屋敷、下屋敷が大半を占めているのだ。江戸の地図を見ればそれは一目瞭然である。しかし、TVの時代劇をみたくて下町は登場するが、武家屋敷はあまり出てこない。出てきても室内の造りであり、外観は映されない。それはもちろんセットが大変だろうが、我々のイメージもわからない。泥絵に描かれた藩邸の前には通行人も多く描かれる。しかしそれは決して賑わいでない。厳然たる門構えと屋敷が肅々と

した雰囲気をもっと出している点も魅力だし、今までとは違った江戸を浮かび上がらせる。

本書で紹介されている泥絵は名所絵ではない。したがって誰彼構わず求めたものでもあるまい。平井聖氏も「泥絵を楽しんだのは、参勤交代で江戸に出てきた各地の藩士たちだったのではなかったかと思います。」と記しているように、上屋敷や下屋敷など藩邸の風景は一般人の求めるものではない、一部の限られた需要によるものだろう。泥絵に描かれた人物はどれも武家のものである。例えば、品川台場は花見の季節を描いているが、浮世絵にみるような浮かれた町人や芸妓などの庶民が一人もいない。愛宕権現の参詣者も皆武家だ。これでは一般人が買ひ求めるはずがない。桜の馬場図や高田馬場図は騎馬をしなければ興味がわくものでもない。極めて限定された、もしくは指定された場であり、武家が求めるが故に、絵師は建物や場面を正確に描かざるを得ないのである。

本書には一枚一枚の泥絵に浅野伸子氏によって解説が付されている。やや専門的な建築史語句があつて、図版をよく見ないと理解しがたい箇所もある。しかし、実際の場にいたかのように門や櫓、番所を小気味良く説明していく。筆者の頭の中には復元された場面が目の前に展開しているかのようだ。CGでも観ているかのようなバーチャル・

リアリティの説明だ。本書の泥絵分析が活きているのも、風俗史や文化史ではなく、建築史の手法によるからだろう。

渡部紳一郎氏のコレクションは江戸の洋風画関係の展覧会を担当したことのある学芸員なら誰でも知っているはずだ。私も以前、美術館の学芸員時代に、何度か所有者のお宅におじゃましたことがある。私が卒業した高校のすぐ近くのお宅だった。当方の申し出に作品を快く拝見させていただき、コレクションの一部を企画展で借用して展示させていただいた。その時は秋田蘭画の小田野直武の作品だった。所有者との楽しいおしゃべりも良く覚えていいる。この度、その泥絵コレクションが本書のような一冊にまとめられ、その価値を見事に高らしめた。お世話になった末端者としても至福の限りである。

(うちだ けいいち 歴史文化学科)